

# 産地として確立した環境保全米を海外へ輸出

みやぎ登米農協(宮城県)

## 取組の概要

- 平成15(2003)年に環境保全米(ひとめぼれ)の作付けを開始し、その販路拡大に取り組んだ結果、環境保全米を高く評価した大手米卸業者の提案をきっかけに、平成30(2018)年産で938トン进行輸出。
- 国・県・市の交付金のプログラム上、輸出米の作付けが最も所得向上につながることを農協が組合員に説明し、産地として輸出の機運を高めた。
- 令和元(2019)年度は海外の低価格へのニーズに応えるため、多収性品種(つきあかり)も輸出用に作付けを奨励。

## 事業化(プロジェクト化)成功のポイント

### 1 環境保全米にしっかりと取り組んだ結果が、輸出開始のきっかけに

同農協は、国内の米の消費減から、管内作付けの8割を超えている環境保全米のひとめぼれの販路拡大のため、輸出を模索。そこに、長年の取引で同農協の環境保全米を高く評価した大手米卸業者が、香港を中心とした販路向けに輸出米の生産を同農協に打診。国・県・登米市の交付金のプログラム上、輸出米の作付けが最も所得向上につながることから、同農協が座談会等で組合員に輸出向けの作付けを促したところ、当初3年間で500トンまで増やす計画であったが、多くの組合員が賛同し、1,000トンを超える作付けの申し出があった。予想外の反響に、同大手米卸業者も尽力し販路を確保。結果、平成29(2017)年以前は米の輸出実績がほとんどなかった同農協の輸出実績は平成30(2018)年産米で938トンに至った。

### 2 環境保全米を基盤とした輸出体制

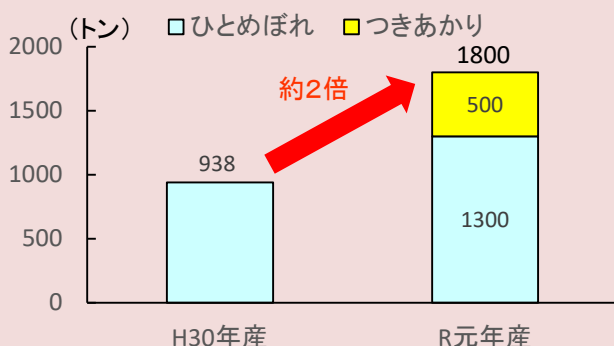
同農協は、平成30(2018)年の輸出米については、長年産地として実効性と信頼性を確保してきた主力品種である環境保全米のひとめぼれに限定し、輸出向けは組合員との契約栽培とした。飼料用米や他品種の生産より手取りが多くなることに加え、農協にとっては生産基準を満たす品質の安定した米を集荷できること、組合員にとっても生産方法を輸出向けに変える必要がないことが大きなメリットとなった。

### 3 米卸業者の販路開拓に加え、農協も販路との信頼構築に尽力

所得向上に向けての組合員への農協の説明と、大手米卸業者による販路確保が初年産輸出938トンの大きな要因であるが、輸出量は同農協の管内の米生産量の約3%に過ぎず、まだまだ拡大できる余地がある。香港では特に同農協の環境保全米への評価が高く、香港のバイヤーが登米の生産現場を訪問し、同農協は購入の御礼に香港の現場に足を運ぶなど、人的交流も始まっている。令和元(2019)年産は、売り先現場のニーズを踏まえ、ひとめぼれに加え、多収性品種の「つきあかり」も輸出することを決定。

## 取組の実績

<米の輸出実績(令和元(2019)年産は見込み)>



○ 平成30(2018)年産米の輸出の実績と、それを踏まえた令和元(2019)年産米の輸出向け作付けを組合員に説明することで、輸出に対する期待が高まった。

○ 令和元(2019)年産は前年比で倍増となる2,000トンの目標を掲げ、実際にはひとめぼれ1,300トン、つきあかり500トンの計1,800トン生産見込みの作付けとなった。